

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第二十七回）

「企救の池」

（小倉城の内堀）

とよくに きく ひし うれ つ
豊国の 企救の池なる 菱の末を摘むと

いも そでぬ
や妹が み袖濡れけむ

卷十六—3876

作者・豊前国 白水郎

（解説）豊前ぶぜんの国の企救の池はに生えている、菱の先の実を摘もうとして、妹の袖がぬれたのであろうか。

・「菱の末（うれ）」の「末」は草の茎や木の幹の先端をいう。このことから、この歌の「菱の末」は当時の食物だった菱の実をさして詠ったといわれる。

・「菱」は池や沼の水中にはえる一年生水草。泥中に落ちた前年の実が、芽を出し長い茎を水面に伸ばし、菱形の葉を浮かべる。夏には柄の先に白い花を咲かせ、9月中旬から11月中旬頃までにするどいとげがある実の収穫が始まる。実は茹ゆでたり、蒸むしたりしてナイフなどで割り、中の果肉を食べると栗に似た風味がするという。

・菱は古くは全国各地の湖沼で見られ、その実は各地で食されたようであ

るが、今は菱の実を食料として摘むことは九州の福岡県や佐賀県の農村地帯で行われていることが知られている。

・中村行利著「万葉と九州」には、この歌の題詞は「豊前国の白水郎の歌一首」とあり、このことから企救の浜の海人たちの間に愛誦されていた民謡であろうかとし、「夫は漁をし妻は農を営む白水郎（海人）の生活を背景として生まれたものであり、海浜生活共通の気持ちを歌い上げたものである。」という説もあると述べている。

・この歌の題詞にある「豊前国」は、現在の福岡県東部から大分県北西部にかけての地をいった。

・「豊国の企救」は九州の最北端に位置する福岡県北九州市の響灘、関門海峡に面し福岡県北部にあった旧郡名で、現在の北九州市小倉北区と小倉南区、門司区にほぼ相当する。

・この歌に詠われている「企救の池」の所在地の一説に江戸時代の国学者・伊藤常足（つねたり）が記した大宰管内志には、【ある人のいった、「企救の池は、小倉城の内郭の東南をめぐるっている池をいうのである。今の城は、その池中に築出して造ったものである。】というのを取りあげて【この説はその通りであろう。この辺は昔も官道の筋と思われるので、ことさら名も高いであろう。万葉に白水郎とあるのは、そこの海人がよんだようにも思われるが、これはかならず白水郎を見てよんだ歌であろう。この池は今も海につづいているので、白水郎にいわれがある。】とし「企救の池」は

小倉城の内堀であると説いている。

・小倉城はJ R小倉駅から徒歩15分余りの北九州市小倉北区内にある。位置は関門海峡を押さえる九州の咽喉部にあたり、小倉の中心市街地を流れ響灘に流れ込む「紫川」の河口にあつて交通の拠点であり、要衝の地であるため、すでに奈良時代の天平十二（740）年に軍団が置かれていたことが知られている。

・今の小倉城は慶長七（1602）年に細川忠興により造られた城であるが天守閣は天保八（1837）年の失火により全焼したため、暫くの間は昔日の姿を失っていたが、昭和三十四（1959）年に在りし日の名城が再建され、小倉のシンボルとして市民に愛され、観光客の目を楽しませてくれる。



（参考文献）日本城郭大系。中村行利著「万葉と九州」。伊藤常足著「大宰管内志」など

(写生地) 現在、北九州の中心街にある小倉城本丸跡一帯は市役所をはじめとする官公庁などが建ち並んでいるが、部分的であるが今も残る建築当時、近くの足立山(標高約600m)から切り出した天然石を主とした城の石垣と万葉集で「企救の池」との説がある内堀風景を描く。(杏花)

